〔塵塚談下〕松魚といふ魚は、伊豆相摸水戸岩城平邊に、多くあつまりし魚なりけるに、文化七午年頃より南部松前邊にて多く取れる樣になれり、同十酉年の夏は、伊豆相摸には至て少し、水戸岩城邊はかはれる事もなきよし、伊豆相摸の海をば、遠沖を廻り東海へ出しと見へたり、是天地の氣の南より北するともいふものにや、

〔浪花の風〕松魚は絶てなし、偶出ることありても、十月より末にて、初松魚賞玩することは絶てなく、土地の人は、今も猶毒魚なりとて、鮮肉は食ふものなき故なり、

〔紀伊續風土記物産八〕鉛錘魚略○中　本國海中に皆産す、殊に牟婁郡に多し、浦々の漁人この魚を採りて、生鮮のものは近きに鬻ぎ、鹽藏のものは遠きに售り、又尾と鰭と脊とを去り、其餘全く切敲きて醢とし、タダキといゝ、又腸許を醢となし酒盗といひて諸方へ出す、此二品は田邊莊、浦々にて製するを上品とす、又年々浦々にてカツヲブシを製し出すこと、其利甚大なり、

〔本朝月令六月〕朔日内膳司供忌火御飯事

高橋氏文云、挂畏卷向日代宮御宇大足彦忍代別天皇行○景　五十三年癸亥八月略○中　是月行幸於伊勢、轉入東國、冬十月、到于上總國安房浮島宮略○中　此時太后八○景行后坂入媛　詔磐鹿六鴈命、此浦聞異鳥之音、其鳴駕我久々、欲見其形、即磐鹿六鴈命乘船到于鳥許略○中　還時顧舳魚多追來、即磐鹿六鴈命以角弭之弓、當遊魚之中、即著弭而出、忽獲數隻、仍號曰頑魚、此今諺曰堅魚今以角作釣柄釣堅魚此之由也、

〔看聞日記〕永享五年十月十五日、自内裏御魚味三種鰹一、鯛三、マナガツヲ、被下畏悦、

〔北條五代記七〕東海にて魚貝取盡す事附人魚の事

鰹鮪は毎年夏に至て、西海より東海へ來る、伊豆相摸安房の浦につり上る初鰹、玄やうぐはんなり、天文六年の夏、小田原浦近く釣舟おほくうかび鰹をつる、此よし北條氏綱聞召、小舟にめされ、海士のゑはざを御見物、珍事の御遊、盃酒に興じ給ふ所に、鰹一つ御舟へとび入たり、氏綱喜悦に

鰹事蹟